圖鑒が如何なる理由によつてかく名づけたかは知らないが、此等の文字は余輩の見る處では、女眞の大小文字として知らるゝものゝ何れとも異つてゐる。羅氏が契丹字と稱し、Pelliot 氏も之に賛意を表して、左樣らしく思はれるといふて居るのは、共に理由は知り得ないが、思ふに女眞字とは相違してやゝ隷書の趣を備へ、從來契丹字として知らるゝものと類する處があるに依るのであらう。これについては後に述べることにする。[6]

契丹文字の材料と認むべきものは僅に此の類に止るのであつたが、こゝに意外にも契丹字を以て記した墓誌銘の發見が、L. Ker 氏の名によつて、北京で發行せらるゝ Le bulletin catholique de Pékin の第十年第百十八號（一九二三年六月號）に載せられた。尤も自分は平常此の雜誌を見る機會を有しないので、初めて此の消息を知つたのは、「通報」[7]に Pelliot 氏が之を轉載したのによつたのである。同氏が書き加へてゐる所によると、氏は既に半年以上前に此の事を Mullie 氏からの消息で知つたのだが、その拓本を得て後に之を言及したいと思つて、報導を差控えて居つたとの事である。之が發見の次第については此等兩雜誌の記する所に讓るが、要するに遼代[8]の慶州、今日の直隷林西縣內、蒙古の巴林と烏珠穆沁との境上、白塔子より北東二十五支里、Warīn-mangga の平地を擁する山中に、遼の聖宗・興宗・道宗の墓、卽ち東・西・中の三陵があつて、その中の道宗陵から、一九二二年七月二十一日に、石に刻した漢字契丹字の墓誌銘二面づゝを得たのである契丹字のものゝ一面は五百八十三字、他の一面は八百五十六字を有して居ると見えるが、Pelliot 氏は字數の多い方を道宗、少い方を遼史に之と共に葬つたと記されてある懿德皇后の墓誌と見てゐる。Le bulletin de catholique にはこの中の前者を網目版の寫眞にして載せてあるが、こゝに轉載した如く極めて不鮮明で、僅少の文字の外は判然識別し得ないのは遺憾に堪えぬ、殊に發掘